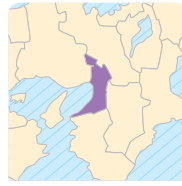


取材日：2019年9月27～28日



アレルギー



南河内医療圏

アレルギー疾患医療拠点病院として「患者教育」をキーワードに使命を果たす。

Point of View

- ① 大阪府アレルギー疾患医療拠点病院として、小児から成人までの重症・難治性アレルギー疾患の患者を診療
- ② 『アトピー・アレルギーセンター』では、アレルギー内科、小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科、眼科が連携しつつ、多職種チームで専門的治療にあたる
- ③ 治療効果を高めるために、多職種による『アトピーカレッジ』などの充実した患者教育を実施

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪はびきの医療センター
副院長

田中 敏郎先生

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪はびきの医療センター
アトピー・アレルギーセンター長/
皮膚科主任部長

片岡 葉子先生

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪はびきの医療センター
アレルギー内科主任部長

源 誠二郎先生

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪はびきの医療センター
小児科主任部長

亀田 誠先生

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪はびきの医療センター
耳鼻咽喉科主任部長

川島 佳代子先生

長年の貢献と実績が評価され アレルギー疾患医療拠点病院に

大阪府羽曳野市にある大阪はびきの医療センターは、2018年に大阪府で4病院のみの大阪府アレルギー疾患医療拠点病院（以下、拠点病院）に指定され、以降、地域での存在感がますます増している。

副院長の田中先生が、拠点病院に指定された理由を話す。

「ひとつには、当院が、アレルギー疾患を重点的に診療する基幹病院として長きにわたり大阪府の政策医療の中核を担ってきたからでしょう」（田中先生）

同院が、大阪府の広い地域の小児から成人までの重症・難治性アレル

ギー疾患の治療に貢献してきた実績が評価されたのだろう。ところで、「ひとつに」と言うからには、別の理由もあるはず。

「2011年、病院のセンター化構想の一環として誕生した『アトピー・アレルギーセンター』の目覚ましい活躍も、大きな理由になったと思います」（田中先生）

各診療科と多職種が連携する アトピー・アレルギーセンター

アトピー・アレルギーセンターを立ち上げたのは、皮膚科主任部長で同センター長も務める片岡先生。「アトピー・アレルギーセンターが開設された背景にはアトピー性皮膚炎患者の急増があります。以前から



左から田中先生、片岡先生、源先生、亀田先生、川島先生



患者数は多かったのですが、保険適用になったばかりのバイオマーカーを使いながらの治療と患者教育を組み合わせた結果、それまで治らなかった重症患者が寛解やそれに近い状態にまで改善するようになり、患者数が一挙に増えた。そこで、アトピー性皮膚炎診療の先駆的な取り組みをしていることを明確にしたセンターをつくってはどうかとの機運が高まっていったのです」(片岡先生)

同センターの命名にまつわる片岡先生の話は実に興味深い。

「アトピー性皮膚炎をアトピーと略して呼ぶため当初、『アトピーセンター』という名称が提案されましたが、それには抵抗があり、アトピー・アレルギーセンターとしました。

赤ちゃんのアトピー性皮膚炎は、喘息、食物アレルギー、アレルギー性鼻炎などアトピー素因がかかわるアレルギー疾患の源流に位置し、そこに介入することで後のアレルギー疾患の進行を防げるといった医学的ストーリーがあったからです」(片岡先生)

アトピー・アレルギーセンターでは、アレルギー内科、小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科、眼科が連携しつつさらには各科の医師や、看護師、薬剤師、栄養士、臨床心理士などの多職種によるアレルギーチームが、患者と向き合う。月に1回は、各科のアレルギーチームが一堂に会してのカンファレンスが開催され、各診療

科間やスタッフ同士の連携の強化が図られているようだ。

各診療科が疾患ごとに柔軟に連携する体制

同院の各診療科におけるアレルギー疾患診療の特色を尋ねると、特色はもちろん、いかに各科が密に連携しているのかが見えてきた。

アレルギー内科主任部長の源先生が同科について話す。

「さまざまなアレルギー疾患を担当しますが、診療の中心は喘息で、現在、地域の病院、診療所をリードできる診療体制を構築している最中です」(源先生)

源先生率いるアレルギー内科との連携を語るのは、耳鼻咽喉科主任部長の川島先生だ。

「耳鼻咽喉科が主に診ているのは、アレルギー性鼻炎と好酸球性副鼻腔炎です。アレルギー性鼻炎は症状が安定せず、これまではなかなか治療の効果が現れなかったのですが、舌下免疫療法の登場により根治が望めるようになりました。一方の好酸球性副鼻腔炎は、2000年代に入って増加してきた疾患で、難治性で再発しやすく、症状をコントロールするには手術が必須です。

どちらの疾患も、喘息と密接な関係があり、アレルギー内科を受診している患者さんを当科でも診るケースが多々あるため、合同カンファ

レンスを行って治療にあたることも珍しくありません」(川島先生)

「重症の喘息では、好酸球性副鼻腔炎を合併しやすいのですが、耳鼻咽喉科で副鼻腔炎の治療をしてもらうと、喘息のコントロールも

安定することが多いので助かっています」(源先生)

小児科主任部長の亀田先生も、各科の連携を同院ならではの特長だと明言する。

「もともと当科は、子どもの喘息を中心に診ていたので、今でもコントロールが難しい患者さんが多数紹介されてきます。また、近年、増えているのが食物アレルギーです。

子どもの場合、たいてい複数のアレルギー疾患を持っていますが、当院ならば、皮膚科、耳鼻咽喉科などがそろっている所以他院に行かずに済みます。大阪府の拠点病院に指定されている4病院の中でも、子どものアレルギー疾患をすべて診られる体制が整っているのは当院の特長です。たとえば、アトピー性皮膚炎のお子さんが皮膚科で治療を受けて、一定の効果が得られたら小児科で食物アレルギーの治療を施すといった連携が、日常的に行われています」(亀田先生)

2週間の教育入院プログラム『アトピーカレッジ』を実施

片岡先生が、アレルギー疾患の治療で、特に重要だと強調するのが患者教育である。

「まず患者さんに、治療へのモチベーションを持ってもらうべく、なぜアレルギー症状が出るのかを説明して理解してもらうこと。次に、薬がしっかり効くよう、アトピー性皮膚炎ならステロイドなどの外用薬の塗り方を修得してもらうこと。これらができ、初めて十分な治療の効果が期待できます」(片岡先生)

忙しい日々の診療の中でも、片岡先生は患者教育を怠らない。皮膚科では、外用薬を処方すると、薬を体のどの部分に塗るべきなのか、人体



図に色を塗りながら丁寧に指導を行う（【資料1】）。

しかし、診療時間内だけでは十分な教育は不可能。そこで、教育入院などの集団教育を行っている。「皮膚科では、成人のアトピー性皮膚炎患者を対象に2週間の教育入院プログラム『アトピーカレッジ』を実施しています（【資料2】、【資料3】）。入院中に、医師や看護師が外用薬を塗って寛解させるのが目標ですが、退院前の1週間は、患者さんに塗ってもらいながら正しい塗り方を指導します。薬では良くならないと思い込んでいた患者さんが、塗り

方次第で症状が改善する体験をし、治療への姿勢がガラッと変わることもしばしばです」（片岡先生）

医師、看護師、薬剤師、栄養士、臨床心理士が講義や指導を担当し、アトピー性皮膚炎のコントロールに必要な知識を教育するアトピーカレッジは2009年から始まり、累計の参加者は約1,600名にも上るといふ。

「患者教育」はどの診療科でも重要なキーワード

「患者教育」は、皮膚科以外の診療科でも重要なキーワードになっている。

アレルギー内科では、喘息患者に対する吸入薬の使用法の指導を徹底して行う。

「紹介で来院する喘息の患者さんについて、吸入薬がきちんと肺まで吸入できているかチェックしてみると、ほぼ半数ができていません。ですから、吸入薬の吸入指導は徹底して行うようにしています」（源先生）

患者を飽きさせない指導に工夫が必要なのは小児科ならだろう。「人形などの模型やイラストを用い、子どもの

患者さんにもわかりやすい疾患や薬の使い方の説明を心がけています」（亀田先生）

川島先生は、最初の患者教育が、患者の治療継続に大いに影響を及ぼすと実感している。

「アレルギー性鼻炎の舌下免疫療法は、抗原を体内に入れて抗体をつくっていく治療方法で、根気よく3～5年、続けなければなりません。しかも最初のうちは、副作用が出る場合もあるため、あらかじめ、どの時期にどんな副作用が出る可能性があるのか、ひどい副作用が出た場合の対処方法などについて教育をしておかないと治療からの脱落につながります。当院では、1年後も脱落せずに治療を継続している患者さんがほとんど。まさに、患者教育の賜物です」（川島先生）

地域の医療レベル向上のためさまざまな院外連携を展開

拠点病院としての同院には、地域全体、大阪府全体の医療レベルを向上させる大事な使命もある。同院はさまざまなかたちでの院外連携を通じて、求められる役割を果たす。

かかりつけ医向けのワークショップを開催しているのは片岡先生だ。「重症のアトピー性皮膚炎における当科の外用療法の基本は、ここ10年ほどで普及したプロアクティブ療法です。当院の治療で寛解し、安定した患者さんをかかりつけの先生方に逆紹介したいのですが、同療法を知らなければ引き受けていただけません。そこで、地域の先生方を対象に同療法のワークショップをスタートさせました」（片岡先生）

川島先生も、かかりつけ医向けの勉強会の開催に意欲的だ。「当院で舌下免疫療法を受ける患者

【資料1】

外用薬の塗り方指導に使用する人体図

薬のぬりかた < 月 日から > ID 341013 様							
場所	<table border="1"> <tr> <td>まえ</td> <td>うしろ</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	まえ	うしろ				
まえ	うしろ						
薬	A軟膏						
場所	<table border="1"> <tr> <td>かお</td> <td>て</td> <td>あし</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	かお	て	あし			
かお	て	あし					
薬							

方法	<input type="checkbox"/> 全体に <input type="checkbox"/> 局所 <input type="checkbox"/> 続ける <input type="checkbox"/> 変える <input type="checkbox"/> 減らす <input type="checkbox"/> 止める
----	---

※ぬる量のゆずは、人差し指の第一関節の長さの量→手のひら2枚分の大きさの範囲に塗ってください。
 ※すりこまず、うすくのはずすように、塗ってください。

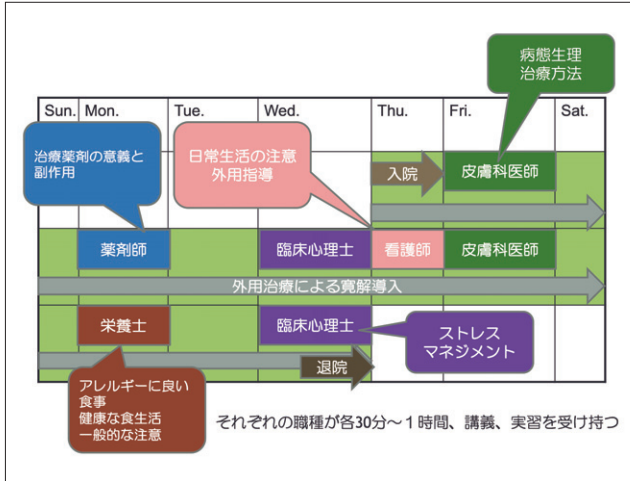
※入浴後に塗っていたらと効果的です。
 ※塗り薬は、薬物の濃度と塗り回数で決まらず、自己判断でやめると症状が悪化する場合があります。
 ※症状が悪化した場合は受診の上ご相談下さい。

大阪はびきの医療センター

出典：片岡先生提供資料

【資料2】

アトピーカレッジのプログラム



出典：片岡先生提供資料

【資料3】

アトピーカレッジの様子



出典：片岡先生提供資料

数は全国有数です。導入は当院で行いますが、先ほど申し上げたとおり治療は長期にわたるので、導入後は患者さんのお住まいに近い、かかりつけの先生に逆紹介して処方継続をお願いしたいのです。しかし、皮膚科のプロアクティブ療法と似た状況で、同療法を知らないとの理由で断られることも多くある。なんとかしなければと、かかりつけの先生方に呼びかけ、舌下免疫療法の勉強会を始めました」(川島先生)

源先生は、かかりつけ医のための喘息の勉強会のほかに、薬局と連携した講習会の開催も手がける。「喘息治療の吸入薬の正しい吸入指導ができる薬剤師の育成を目的に、薬局と連携して吸入指導の講習会を開いています」(源先生)

亀田先生は院外で、各疾患の研究會などを結成している。「最近の取り組み例を挙げれば、喘息にかかわる有志が集う研究会『南大阪小児アレルギー・カンファレンス(SOPAC)』を立ち上げ、喘息で入院する子どもの減少を目標に掲げて活動をしています」(亀田先生)

アレルギー疾患医療を
リードする拠点病院として

アレルギー疾患の患者数が増加の一途をたどっている中、同院の今後には耳目が集まる。各先生に思うところを話してもらった。「拠点病院としての役割は、診療以外にも、情報提供、人材育成、研究など多方面にわたります。

病院の内外で、アレルギーについて専門的な知識を持つ医師やメディカルスタッフを育てるとともに、患者さんのQOLを高めるオリジナルの研究も展開していきたいですね」(田中先生)

「超高齢社会を迎え、患者さんの高齢化が進んでいます。今後は、吸入が困難になっていく高齢者のサポートのため、訪問看護師にも吸入指導の輪を広げていくつもりです」(源先生)

「舌下免疫療法の勉強会開催により、アレルギー性鼻炎患者の逆紹介を受けてくれる診療所は増えてきましたが、まだ患者数の増加に追いついていません。

かかりつけの先生方への普及活動を、より強く推し進めていきます」(川島先生)

「地域はもちろん、日本中のすべてのアレルギー疾患の子どもたちが適切な医療を受けられるようにするのが究極の目標です。当院でできる医療を、どこの医療機関でもできるようにするための情報発信に尽力します」(亀田先生)

「近年、成人の食物アレルギー患者の増加が著しいのですが、治療に本腰を入れる施設が少なく、治療法も確立されていません。当院が率先して、できるだけ早く治療の道筋をつけ、患者さんを救っていかねばと思っています」(片岡先生)

先生方の話からは、アレルギー疾患医療をリードする拠点病院に籍を置く者としての覚悟が感じられた。

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪はびきの医療センター

〒583-8588
大阪府羽曳野市はびきの3-7-1
TEL：072-957-2121